



TATSU



Driving All Night

<http://flagspot.net/flags/index.html> 旗の図版はここから

- <http://www.guam-online.com>
- <http://www.saipan-press.com>
- 東京大学東洋文化研究所
<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~worldjpn/documents/texts/pw/19110713.T1J.html>
- 公学校に見る全員教育
<http://www.bl.mmtr.or.jp/~idu230/his/his/bunken/idumi/syuron/2-2.htm>
- 読売新聞 1921.3.17(大正 10) ヤップ海電問題
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=00104499&TYPE=HTML_FILE&POS=1&TOP_METAID=00104499
- 宮内庁「天皇陛下のお言葉」
<http://www.kunaicho.go.jp/gaikoku/gaikoku-h17saipan.html>

参考文献

- 島田啓三『冒険ダン吉』少年倶楽部文庫，講談社，1976，もともとは1933～39まで『少年倶楽部』に連鎖されていたもの。
- 船坂弘『秘話パラオ戦記』光人社 NF 文庫，2000，もとは『玉砕戦の孤島に大義はなかった』1977
- 板倉聖宣ほか『日本の戦争の歴史』仮説社，1989
- 牟田清『太平洋諸島ガイド 南の島の昔と今』古今書院，1991
- 大野俊『観光コースでないグアム・サイパン』高文研，2001
- 三枝篤夫『マーシャルの奇跡 マーシャルの大早魃を救った日本人たち』蝸牛新社，2002
- 西牟田晴『僕が見た大日本帝国』情報センター，2005

- ・ 「エンカルタ総合百科 2005DVD」マイクロソフト
- ・ 中野文庫 植民地法令
<http://www.geocities.jp/nakanolib/etc/colony/nanyo.htm>
- ・ 南洋庁関連写真
http://www.bunsei.co.jp/NRoss/6_southseaagency.htm
- ・ 岩木みどり「南洋群島における植民地時代の日本語教育年表」
<http://www.age.ne.jp/x/oswcjlr/longzemi/micronesiatimeline.htm>
- ・ 南洋群島 <http://www.kaho.biz/main/nanyo.html>
- ・ 平高史也「南洋群島における日本語教育」慶応大学講義
http://gc.sfc.keio.ac.jp/class/2004_14621/slides/08/3.html
- ・ 国立公文書館 <http://www.archives.go.jp/>
- ・ グアム政府観光局
<http://www.i-loveguam.com/main/top.html>
- ・ パラオ アンガウル州立自然公園
<http://www.ows-npo.org/angaur/index.html>
- ・ パラオ政府観光局
<http://www.palau.or.jp/index.html>
- ・ マリアナ政府観光局
<http://japan.mymarianas.com/japanese/index.html>
- ・ マーシャル諸島政府観光局
<http://www.visitmarshallislands.com/main.htm>
- ・ ミクロネシア連邦政府観光局
http://www.visit-micronesia.fm/index_j.htm
- ・ ミクロネシア はるかなる歩みの歳月
http://www.yashinomi.to/micsem_j/photos.htm
- ・ Flags Of The World

- ・ 斉藤達雄『ミクロネシア』ずずさわ書店，1975
- ・ ダンカン＝カースルレイ，生田滋訳『図説 探検の世界史 1 大航海時代』集英社，1975，原著は1971発行。
- ・ 『日本植民地史 3』別冊一億人の昭和史，毎日新聞社，1978
- ・ 矢野暢『日本の南洋史観』中公新書，1979
- ・ 桜井均『ミクロネシア・レポート 非核宣言の島々から』日本放送出版協会，1981
- ・ 小林泉『ミクロネシアの小さな国々』中公新書，1982
- ・ 家長三郎『戦争責任』岩波書店，1985
- ・ 原康史『第一次世界大戦と日本 激録・日本大戦争 25』東京スポーツ新聞社，1987
- ・ 本多勝一『マゼランが来た』朝日新聞社，1989
- ・ マーク＝R＝ピーティ「日本植民地支配下のミクロネシア」『近代日本と植民地 1 植民地帝国日本』岩波書店，1992
- ・ 小林泉『アメリカ極秘文書と信託統治の終焉 ソロモン報告・ミクロネシアの独立』東信堂，1994
- ・ 平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍 外交と軍事の接続』慶應義塾大学出版会，1998
- ・ 矢崎幸生『ミクロネシア信託統治の研究』御茶ノ水書房，1999
- ・ 中島洋『サイパン・グアム 光と影の博物誌』現代書館，2003
- ・ 板倉聖宣ほか『理科教育史資料』東京法令出版，1986
- ・ 成瀬治ほか監修『山川 世界史総合図録』山川出版社，1994
- ・ 『プロムナード世界史』浜島書店，1999
- ・ 「世界大百科事典 第二版 CD-ROM」平凡社
- ・ 「岩波 日本史事典 CD-ROM」システムソフト
- ・ 「スーパーニッポニカ 2003DVD」小学館

テーマの作文を書いています。

でも、それはボク自身のことに思えます。もう逃げない。勝手にたのしんでやるぞー

「海ゆかば」をなぜかそらで歌える

丸山秀一 kasetu.maruyama@nifty.com



Count Down

典拠文献

- ・ 矢内原忠雄『南洋群島の研究』岩波書店、1938
ほとんどの本の「底本」。
- ・ ロナルド＝ウェルチ、斉藤数衛訳『暗黒の海に挑む マゼラン』学習研究社、1971、原著は1955

*If I go away to sea.
I shall return a corpse awash;*

*If duty calls me to the mountain,
A verdant sword will be my pall;*

*Thus for the sake of the Emperor
I have no regret.*

逃げない

今月は、「心ここにあらず」で、この「ミクロネシア」のレポートに、なかなか取り組めませんでした。まずなんといっても、総選挙が気になって仕方ありませんでした。そして、それは予想通りの自民党の圧勝でした。その予想は、米国最優秀教師の本がベストセラーになっていることから立てることができました。そこで、そのレポートを作ってしまいました。

来年度は生徒が3名しかいないので、事実上「今年が最後」となる学校祭も、担任でも担当でもないのに、つつい頑張ってしまいました。自分から勝手にどんどんやることにしたのです。そんな学校祭を、一番たのしんでいたのは、シズカさんの5才の息子と校長のようでした。ナゲ?! でも、やっぱり、生徒さんたちは、準備を一所懸命やるとケンカになってしまいました。うーん、これは法則かも。

学校祭の後は、これまた、ボクが担当でもなんでもないのに、勝手に「生活体験発表会地区大会」の指導をやっていきます。代表のアイコさんは「ずっと逃げていたけど、もう逃げない」という

も、日本人が優先となっていきました。そして、南洋群島の経済発展も、日本人を裕福にさせただけでした。そして、住民たちは、自分たちとは何の関係もない、戦争にかり出されました。

現地住民の日本に対する感情は複雑でした。「よい日本」と「悪い日本」があるのです。それは、この人口グラフにもよく表れています。このグラフこそが、日本統治の住民の評価なのです。

続く、米国統治でこのグラフは、どうなってゆくのでしょうか。

つづく

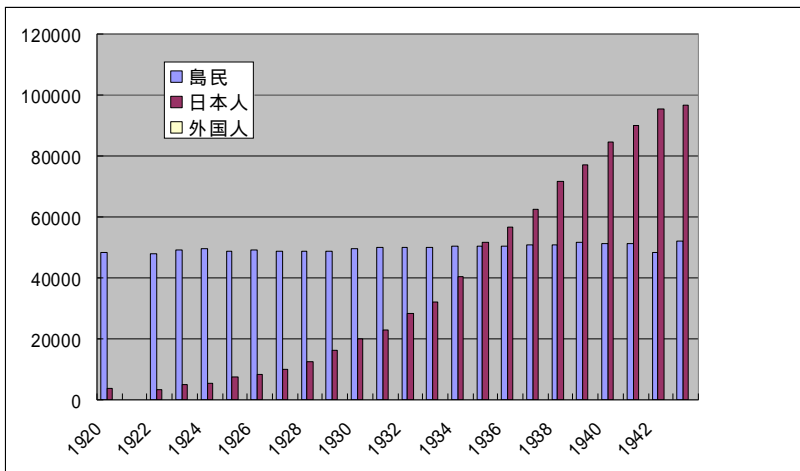
小林泉『ミクロネシアの小さな国々』には、次のような話が紹介されています。

現在、ミクロネシアは、日本人観光客がたくさん訪れるところ です。少し前まで、現地のガイドは、日本統治時代に日本語を覚えたひとたちでした。

ミクロネシアには、「バンザイクリフ」とか「自決崖」と呼ばれる観光名所が多くあります。そこでガイドは次のように説明します。「追いつめられたわが同胞が、祖国に一番近いこの岸壁に立ち、捕虜の屈辱を逃れるために、潔く飛び込んだのです。さあ、みんなで 海ゆかば を歌いましょう」

しかし、日本人観光客は「変なガイド」と誰も歌わず、記念写真などに集中します。中には「俺たちは、たのしむために来ているのであって、そんな暗い話はない」と言うひともあります。そして、ガイドは怒り出します。「オマエタチハ、ソレデモニッポンジンナノカ」と。

日本統治の評価



スペインからドイツ統治時代にかけて、島民の人口減少が続き、それは「絶滅する」とまで考えられたほどでした。日本の統治は、人口減少を食い止めることには成功しました。

スペインは、島民に関心がなく、ドイツは労働力としてしか見ていませんでした。しかし、日本は「植民地でも、領土でもない南洋群島の委任統治」という使命を表面的には、全うしようとしました。そして、白人よりも、はるかに現地住民に対する差別が少なかったのです。そして、日本は南洋群島を開発し、産業を興し、経済的に自立できるようになるまでにしました。教育の徹底により、各島の住民は、意思の疎通もできるようになりました。スペインとドイツ時代には、多くの反乱も起こりましたが、日本統治時代には、そういうことは一度もなかったのです。

しかし、南洋群島に日本人が増えて、しまいには現地住民の倍にまで達しました。こうなると、現地住民のための公共サービス

予想

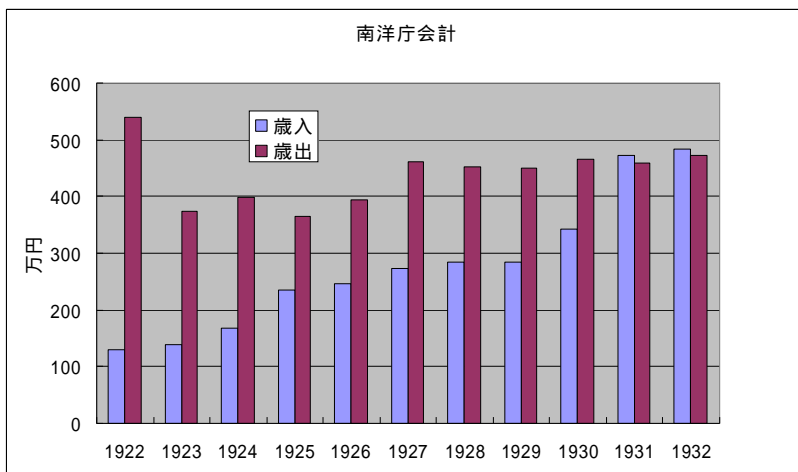
- ア 急激に増加した
- イ 緩やかに増加した
- ウ ほとんど同じだった
- エ 緩やかに減少した
- オ 急激に減少した。

2005年6月サイパン島訪問への出発にあたっての天皇の言葉

終戦60年に当たり、サイパン島を訪問いたします。

サイパン島は第一次世界大戦後、国際連盟の下で、日本の委任統治領になり、沖縄県民を始めとする多くの人々が島に渡り、島民と共にさとうきび栽培や製糖業に携わるなど、豊かな暮らしを目指して発展してきました。しかし先の大戦によりこの平和な島の姿は大きく変わりました。昭和19年6月15日には米軍が上陸し、孤立していた日本軍との間に、二十日以上にわたり戦闘が続きました。61年前の今日も、島では壮絶な戦いが続けられていました。食料や水もなく、負傷に対する手当もない所で戦った人々のことを思うとき、心が痛みます。亡くなった日本人は5万5千人に及び、その中には子供を含む1万2千人の一般の人々がありました。同時に、この戦いにおいて、米軍も3千5百人近くの戦死者を出したことで、また、いたいけな幼児を含む9百人を超える島民が戦闘の犠牲となったことも決して忘れてはならないと思います。

南洋群島の経済的自立



委任統治の初期は、莫大な赤字を出しており、大蔵省では「南洋群島放棄論」もだされていきました。しかし、1931年度以降、歳入が歳出を上回り、翌年度からは年間 0 万円の黒字分を政府の一般会計へ繰り入れしていました。歳入の70%は出港税によるもので、民間の南洋興発の経営が成功した事によるものです。

このように日本は、委任統治で島民に教育を施し、経済も発展させて、経済的自立も達成しました。

【問題】

では、南洋群島に元々住んでいた島民たちは、日本の統治を歓迎していたのでしょうか。それを人口の変化で見いきましょう。日本が占領時に5万人いた南洋群島の住民の人口は、その後どう変化したと思いますか。

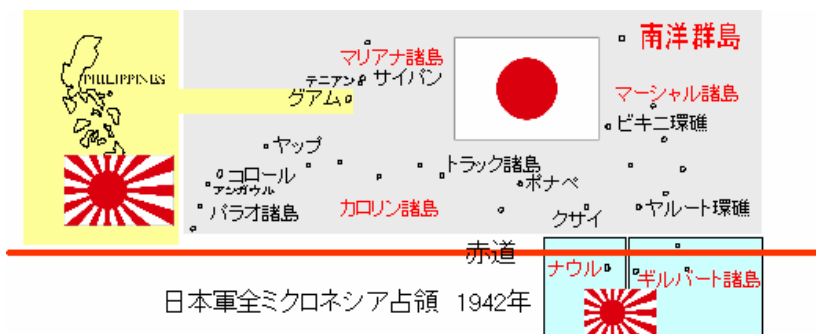
て、南洋庁の管理下にありました。部落では、様々な日本の伝統やお祭りが催され、島民のたのしみごとのひとつにもなりました。

【問題】

ドイツのミクロネシア経営は、大幅な赤字でした。では、日本の南洋群島統治はどうだったのでしょうか。

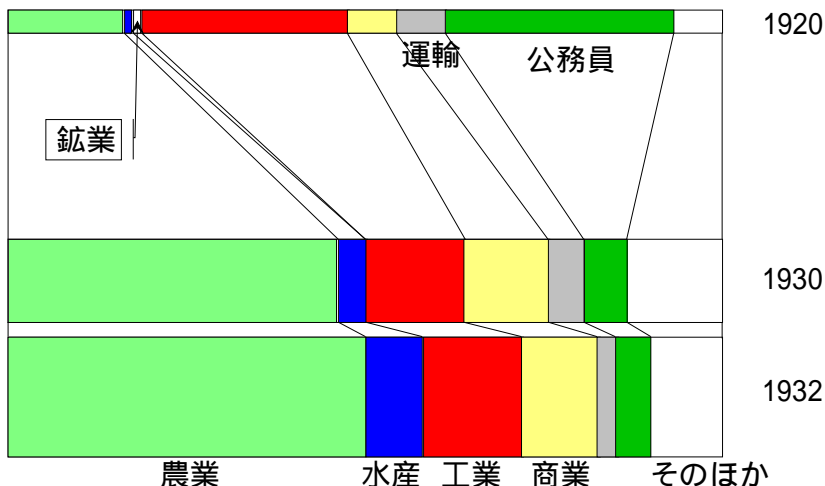
予想

- ア 赤字
- イ ほぼ収支均衡
- ウ 黒字



南洋群島職業別邦人人口

『南洋群島の研究』より [C]MaruyamaShuichi



南洋群島にいた日本人の半数以上が農業従事者で、そのほとんどがサイパン支庁（マリアナ諸島）にいました。当時日本は不況であり、農村では多くの小作が貧困にあえいでいました。南洋興発株式会社は、その内地での余剰労働力を南洋群島にて拓殖移民として採用し、主にサトウキビの生産に当たらせました。

南洋興発が特に目をつけたのは、農業生産が全国平均の半分にも満たない沖縄の小作農民でした。沖縄と南洋群島は気候環境が似ていて、しかも沖縄の農民はサトウキビのことも良く知っていました。そのため、移民の半数以上が沖縄出身者でした。移民たちは、南洋群島の肥沃な土地でそれまでの数倍の賃金を得て、頑張っていたのです。

こうした、日本人入植者は、「総代」を代表とする「部落」とし

【問題】

では、10万人の日本人（軍人は含まれない）は、南洋群島でもに何をしていたのでしょうか。

予想

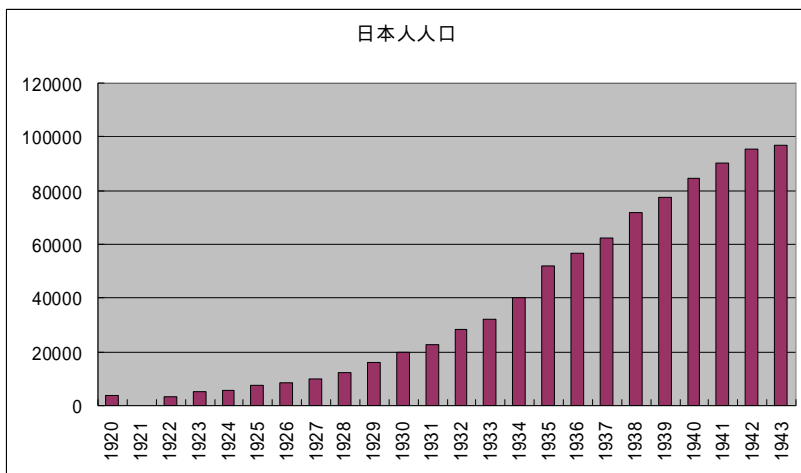
- ア 農業
- イ 漁業
- ウ 鉱業
- エ 公務員
- オ そのほか



Banzai Cliff

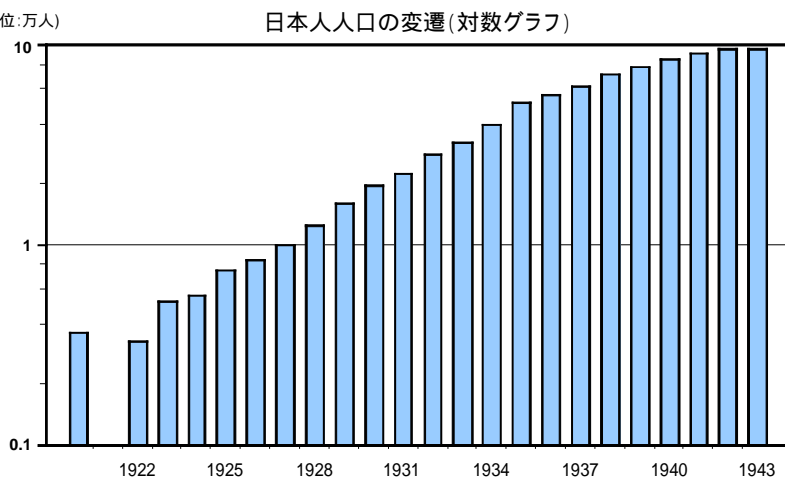
www.namamalo.org/weblog/2004_11_01_archive.html

日本人人口の増大



南洋群島における日本人の人口は、敗戦前には、占領時の 2000 倍となる 10 万人弱にもなっていました。日本政府は、移住を奨励したことはないのに、どうして多くの日本人が南洋群島に行ったのでしょうか。

(単位:万人)



す。

1944年7月、米軍はサイパン島を占領しました。大本営は「サイパン島の在留邦人は終始軍に協力し、戦えるものは戦闘に参加して将兵と運命を共にするの如し」と兵士の全滅と、住民の自決を伝えました。

米軍は、マリアナ諸島を基地として、爆撃機を発進させて、日本本土への爆撃を続け、1945年8月6日、テニアン島より飛び立った米爆撃機は、原子爆弾を広島に投下しました。日本の敗戦で、戦争は終結し、南洋群島では1000名弱の島民が犠牲となりました。

かくしてミクロネシアは米国に占領され、日本人は肅々と島を後にしていったのでした。

【問題】

1914年、日本がドイツ領ミクロネシアを占領したとき、そこには、5万人の島民に対し、日本人は0人がいただけでした。その後、日本人は、増え続けましたが、敗戦前にはどれぐらいに増えていたと思いますか。(兵隊は含みません)

予想

- ア 10倍ぐらい
- イ 100倍ぐらい
- ウ 1000倍ぐらい
- エ もっと多い

戦時体制

戦時体制は日本人のみ適用されるはずでしたが、開戦とともにやってきた日本軍は、有無を言わず島民を戦時体制下におきました。軍は、島民の食料や住居、土地などを徴発し、また強制移住させ、軍事基地建設のために強制労働させました。一部の日本語の得意な島民は、日本人でもないのに「挺身隊」などとして「徴兵」もされたのです。

開戦の翌年には、島民に対する米の配給が廃止され、ほかの物資の配給も日本人の 1/3 しか与えられませんでした。島民は、自分たちの畑やヤシの木から、食料を得ることも禁止されたのです。

敗戦が近くなると、南洋群島は本土からの補給がたたれ、どこでも食糧の確保が大問題となりました。小さな島に、守備兵が多数送り込まれたようなところは、米軍が上陸しなくても、兵隊たちは餓死し、あるいは自決していったのでした。

それでも、パラオやサイパンのような、もともと日本人がたくさん居たところは、軍隊と島民は、それなりにうまくやっていたようです。でも、ずっと米国領だったグアムや、日本の統治が余り行われなかったマーシャル諸島などでは、住民が日本軍に虐殺されることも多々ありました。

島民は、「日本は世界一であり、神の国だから負けない」という皇民化教育を受けていました。しかし、米軍が攻めてくると、日本軍はあちこちの島で、全員が自決して死んでいくのでした。島民が、さらに驚いたのは、民間人も軍人と一緒に自決していくことでした。幸いなことに、「三等国民」の島民には、あまり「生きて虜囚の辱めを受けず」という「戦陣訓」は、浸透していなかったのです。それでも、日本人と一緒に自決した島民もいたようで

秘密協定

国連との関係を絶ったことで、南洋群島統治の正当性がなくなることを恐れた日本は、「南洋群島の主権はドイツにあるが、将来、代償と引き換えに日本の領土となることに同意する」という密約をドイツと交わしました。

三国同盟の翌月、日本には大政翼賛会が発足し、年末には南洋群島にも、すでにあった島民婦人勤労奉仕会、島民青年団、島民警防団などを傘下にまとめて、南洋群島大政翼賛会が作られました。こうして、島民も戦時体制へと組み込まれていったのです。

【問題】

1941 年末、日米は開戦し、ミクロネシアも日米戦争の戦場となりました。では、日本は島民を現地邦人と同じく保護したのでしょうか

予想

- ア 優先して保護した
- イ 邦人と同じように保護した
- ウ 邦人優先だった

る」と弁明しました。しかし、国連は統治条項違反を認めて、対日制裁を決定しました。

その決定に反発した日本は、国連との関係を一切絶つことを決定し、統治条項を無視して、島民を徴集して強制労働させて、軍事基地化を図り、年次報告書の提出も以降行いませんでした。

1940年2月11日には、南洋庁のあるコロール島に、官幣大社南洋神社がつくられ、皇紀2600年として鎮座祭が行われました。以降、神社前を通る者には、お辞儀が強制され、違反者には強制労働が課せられました。

【問題】

1940年9月、日本、ドイツ、イタリアは三国軍事同盟を結びました。ナチスは綱領に「旧植民地回復要求」を掲げており、南洋群島は、もともとドイツの植民地だったところを日本が占領したものです。では、三国同盟の時に、南洋群島のことを問題にはならなかったのでしょうか。

予想

- ア 問題にならなかった
- イ ドイツへの返還が約束された
- ウ ドイツの主権が認められた
- エ そのほか

戦時体制へ

1935年、第三代の南洋庁長官になった堀口満貞は、統治方針を次のように述べていました。「仮に委任統治に関する条約がなかったとしても、文明の先進国として日本は誠心誠意、後見の本旨に従い善良なる管理者の注意を持って、住民の成長発達とその財産保護の責に任じなければならない。群島の資源の開発や在留邦人の発展も喜ぶべき事であるが、くれぐれも注意しなければならないことは、島民の福祉と発達に矛盾しない範囲において行わなければならない。島民の福祉や発達を阻害する企業のごときは、たとえそれが日本人の利益になることでも排除すべきである」

南洋庁は、その方針通りに、国連を脱退した後も、統治要項の義務に従って統治を続け、国連にも毎年年報を提出していました。しかし、軍備制限条約を廃棄した後は、国内から囚人を南洋群島に連れてきて、軍事基地建設を始めました。

1937年、日本と中国は全面戦争に突入し、国内では「国民精神総動員運動」が始められました。これは「国家の一大事の前に、国内のあらゆる階層が協力一致して義勇奉公の誠を尽くす」を目的としており、南洋群島でも実行委員会が組織されました。そして、国防献金が行われ、紀元節に天皇の写真に拝んだり、皇居遙拝や戦勝祈願祭を行ったりしました。また日本精神高揚の日、非常警戒の日、時局認識の日、享楽抑制の日、愛国運動の日、早起きの日などが島民教育として実施されました。翌年には、資源や産業、労働力などをすべて国家統制下におく国家総動員法が施行され、南洋群島にも適用となったのでした。

この事態に中国は「中国攻略の強化であり、統治条項違反」と国連に訴え、日本は「国家総動員法は、日本臣民にのみ適用され

「海の生命線」

日本の委任統治継続声明に対して、国連は「学者が決定すること」として、なかなか公式見解を示すことができませんでした。そして、1935年1月になって、国連は委任統治の継続を、従来のまま、正式に承認しました。

当時の国策映画「海の生命線」には、南洋群島の様子が次のように描かれていました。日の丸の小旗を持って体操する児童と教室で「天長節は天皇陛下がお生まれになった日です・・・」と教科書を読む公学校の児童。そして映画は、南洋の経済的重要性を述べた後、「日本満州南洋の経済ブロックが完成するならば、世界各国のいかなる圧迫にも耐えられる。南洋を足場にして、インド洋、アフリカに向かって経済的發展を試みるのが大和民族の将来ではないだろうか」と結ばれていました。

【問題】

日本は1933年3月、国連脱退を通告（発効は2年後）し、1934年末には、軍備制限条約の廃棄（発効は1年後）も米国に通告しました。では、1935年3月の国連脱退後も、日本は「軍事基地建設禁止」などの統治条項を守ったと思いますか。

予想

- ア 守らなかった
- イ 軍備制限条約廃棄発効までは守った
- ウ 開戦までは守った
- エ 開戦後も守った

委任統治継続

1933年、日本政府は「南洋群島の主権は、国連ではなく同盟連合国にある。委任統治は国連からではなく、パリ会議で付与された。国連規約には受任国が国連加盟国である条件はない。国連脱退後も受任国としての地位は何ら影響を受けない」として、そのまま委任統治を続けました。

日本海軍は「南洋群島は、海の生命線であり、これを手放すことは絶対にできない」と主張しており、「海の生命線」という言葉が流行するほどでした。

しかし、日本は、委任統治条項と軍備制限条約により、南洋群島を軍事基地化することは、できませんでした。

【問題】

では、国連は日本の委任統治継続を認めたのでしょうか。

予想

- ア 認めた
- イ 条件付きで認めた
- ウ 認めなかった

南洋群島内のあるゆる企業において、島民の給与は同じ仕事を
する日本人の半分以下でした。(グラフは、アンガウル鉱山での平均
月収。チャモロ以外は、出稼ぎ労働者)

日本政府は、島民と日本人との結婚を奨励し、生まれた子ども
は、日本人として公学校ではなく、小学校に通わせたのでした。

1932年には国連に「南洋群島の軍事基地化」の問題が取り上げ
られましたが、事実無根であったため、国連も了承しました。

【問題】

1932年日本は「満州国」を建国し、それを認めない国連から脱
退しました。では、国連委任統治領としての南洋群島統治も日本
はやめたのでしょうか。

予想

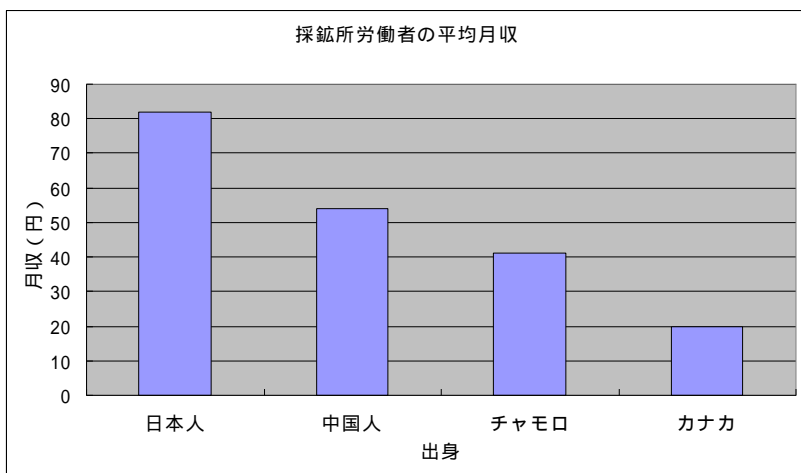
- ア 日本に併合した
- イ そのまま委任統治を続けた
- ウ 軍事基地化した
- エ 国連に返還した
- オ そのほか

国籍問題

日本は、占領時代から南洋群島の住民を「天皇の赤子」として皇民化教育を進めてきました。1923年、国連は「皇民化教育は南洋群島の日本化をはかるもの」として「原住民に保護を理由として日本国籍を与えてはならない」と決議したのです。

これに対して日本は、1928年是正措置を申し入れて、国連に了承されました。その内容は「原住民は日本の国籍を取得しない。臣民との区別のため島民と名称する。島民は、自発的な帰化か結婚により国籍を取得できる」というものでした。

このことは、住民と日本人との差別教育を国連が容認することとなり、島民たちは「三等国民」(当時列車などで、一等車には金持ち、二等車には平民が乗った。当時「二等国民」とは国籍を与えられた朝鮮などの植民地の人たちへの蔑称)として、馬鹿にされる元にもなりました。また島民に適用される「禁酒」の統治規定も、日本人に島民への差別感情を持たせることに貢献しました。



伝統的制度の崩壊

1921年末、南洋庁は「島民村吏規定」を公布し、手当てを支給して族長を村長に任命して、行政に関与させました。しかし「村長」は「南洋庁の命令を伝達執行」するためのものであり、その職務は「島民をして常に日本帝国に対して忠順ならしめ、法令を遵守させる」ことでした。こうして族長の伝統的権限は消滅していき、統治機構に組み込まれていきました。

【問題】

委任統治条項には、「国連への年次報告書の提出」が規定されており、日本はそれに従っていました。日本からの年報に対して、国連委任統治委員会は二度クレームをつけたことがあります。そのひとつは「軍事基地化」のことでしたが、もうひとつは何についてのことだったと思いますか。

予想

- ア 強制労働
- イ 皇民化教育
- ウ 禁酒法
- エ 宗教の自由

また、日本は国連の是正勧告に従ったのでしょうか。

ミクロネシアの旗

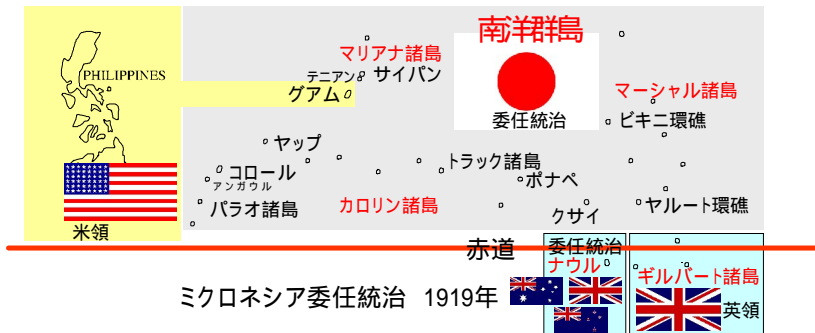
第3部 海ゆかば

2005.9.24

札幌たのしい授業・研究サークル用レポート

仮説実験授業研究会・北海道・丸山秀一

[C]Maruyama Shuichi



【問題】

占領時代，日本は族長の伝統的権限をある程度回復させて自治を行わせていました。では，委任統治で日本は，現地住民をどのように統治したと思いますか。

予想

- ア そのまま伝統的な自治を継続させた
- イ 近代的な自治をさせた
- ウ 自治をさせなかった
- エ そのほか